〈資料〉

労働史・史料への旅（1）
―大牟田・荒尾の事例―

法政大学キャリアデザイン学部教授　梅崎　　修
高千穂大学経営学部教授　田口　和雄

1　なぜ、史料を訪ねるのか

本稿は、労働史における史料保存・整理の状況を調べ、それら史料を基にした展示などの活動を行っている団体や地域に取材し、その活動を伝えることを目的としている。歴史研究に止まらず、まちづくり等と連携した歴史実践も含めて質問したインタビュー調査結果を紹介する。

同じ地域に何度も訪問し、史料保存、集合的記憶、および地域・組織の関係性（とその変遷）を分析する学術研究もあるが、本稿は、労働史研究者による全1回の視察報告という位置づけになる。地域と史料保存・活用の紹介に止まるが、今後、多くの地域や組織の調査を続けることで、労働史史料の全国的な状況を把握することにつながると考えている[1)]。また、失われつつある労働史の資料と記憶をどのような形で継承しようとしているかを発信することで、全国で同じような取り組みを行っている人たち、労働史の未来の利用者にも共有してほしいと考えている。

我々はかつてオーラルヒストリーについて、英米における拠点の調査報告を行った[2)]。歴史学の史料アーカイブとしてオーラルヒストリー・センターが機能していることはもちろんであったが、地域活動との連携、教育との連携、展示やアートイベントの連携などが行われていた。つまり、自分たちの歴史について考えること、社会の集合的記憶について想い、次世代について記録したことを発信する行為は、狭い意味での学問の世界に押し込められる活動ではない。言い換えれば、それぞれの活動が並行しつつ、相互に影響し合うことで、「歴史（学）」が社会に根付いていると、我々は考えている。したがって本稿では、労働史・史料への旅と題して、訪問して様々な歴史実践に学び、その実践を発信することで多くの実践をつなげることを目指したのである。

今回は、第一の訪問先として炭鉱の町であった大牟田（および、一部荒尾）の報告を行う。続く第2節では、炭鉱の町である大牟田について説明する。第3節では、大牟田の労働史・史料の保存展示状況を紹介する。第4節では、記憶を引き継ぐ諸活動を紹介する。最後に第5節は、まとめである。

2　炭鉱の町としての大牟田

（1）概況[3)]

大牟田市は福岡県南部に位置し、南と東を熊本県に接している、人口約11万人（111,858人、2021年2月1日現在）の都市である。

「炭鉱のまち・大牟田」の中心であった三池炭鉱の歴史を概観すると、1469（文明元）年に石炭が稲荷山（現在の大牟田市大浦町付近）で発見されたことがはじまりである。江戸時代に入るとこ

の地域を領地としていた柳川藩と三池藩によって石炭の採掘が進められた。

明治期になると、明治政府が進める近代化政策の下、1873（明治6）年に三池炭鉱は官営化され、西洋技術の導入、機械化により採掘の近代化が進められた。1889（明治22）年に三井財閥に払い下げされた後、増産をはかるため三池炭鉱の勝立坑、宮原坑、万田坑などが開坑された。こうした炭鉱開発に併せて、石炭運搬効率化をはかるため、三池炭鉱専用鉄道の整備（1905〔明治38〕年）と三池港の築港（1908〔明治41〕年）が行われた。その後も新たな炭鉱開発と採炭技術の近代化が進められ、三池炭鉱は明治、大正、昭和期を通じてわが国の工業化・近代化に貢献し、大牟田は南隣の熊本県荒尾市とともに「炭鉱のまち」として発展した。

第2次世界大戦で大牟田の市街地は大きな被害を受けたものの、三池炭鉱の石炭資源を背景とした石炭化学工業で栄え、戦後日本の経済復興に大きく貢献した。しかし、1960年代に始まった石炭から石油へのエネルギー革命や産業構造転換などにより石炭産業は衰退しはじめ、1997（平成9）年3月の三池炭鉱の閉山でその歴史を終えた。その後、大牟田市は環境リサイクル産業などの新興産業（エコタウン）や、立地条件を生かした大牟田テクノパーク（工業団地）への企業誘致などに力を入れる一方、100年以上にわたる炭鉱の歴史資産の保存にも力を入れ、2015（平成27）年7月に三池炭鉱宮原坑・専用鉄道敷跡、三池港等の三池炭鉱関連資産が「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」として世界文化遺産に登録された。

（2）大牟田の歴史文化遺産 [4)]

2015（平成27）年7月に世界文化遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」は、19世紀後半から20世紀の初頭にかけて日本の工業立国の土台を構築し、基幹産業となった製鉄・製鋼、造船、石炭産業において急速な産業を成し遂げたことを証言する遺産群である。同遺産は、九州・山口を中心に静岡県伊豆の国市、岩手県釜石市を含む8県11市に分布する23の資産から構成され、構成資産全体で1つの世界遺産としての価値を有している。

同遺産は23の構成遺産を8のエリアに区分し、大牟田・荒尾にある構成遺産は三池炭鉱の「宮原坑」と「万田坑」、「専用鉄道敷跡」、「三池港」の4資産で、熊本県宇城市の「三角西港」とともに「三池」エリアに属している。以下では、大牟田・荒尾の構成遺産として登録されている宮原坑、万田坑、専用鉄道敷跡、三池港の4資産について概観する。

①宮原坑

宮原坑は三井財閥が払い下げを受けた後に初めて開削された、明治期から昭和初期にかけての三池炭鉱の主力坑口である（図1）。1898（明治31）年の出炭開始から年間27万トンの出炭量を記録し、1908（明治41）年には三池炭鉱（大浦坑、宮浦坑、万田坑、宮原坑）全体の28%（431,618トン）を占めていた。明治から大正期を通じて平均して年間40万トンの出炭を宮原坑は維持していたものの、昭和初期の恐慌と不況に伴う各炭鉱の合理化と新たな坑口（四山坑等）の開削により1931（昭和6）年に閉坑された。

図1. 宮原坑の外観
（資料出所）大牟田の近代化産業遺産ホームページ
（https://www.miike-coalmines.jp/）

②万田坑

宮原坑に次いで開削された万田坑は1902（明治

図２. 万田坑の外観
（資料出所）大牟田の近代化産業遺産ホームページ
（https://www.miike-coalmines.jp/）

35）年に出炭が開始され、宮原坑とともに明治期から昭和中期にかけて採炭された三池炭鉱の主力坑口で、熊本県荒尾市に位置していた（図 2）。大正期に入ると設備投資や施設の近代化によって出炭量は増大、その規模は大正期が年平均 66 万トン、昭和初期は年平均 86 万トンであった。しかし、第 2 次世界大戦の被害を受け、採炭効率が低下したために 1951（昭和 26）年に採炭が中止、一部施設が維持されたものの 1997（平成 9）年に閉山された。

③三池炭鉱専用鉄道敷跡

三池炭鉱専用鉄道敷は、官営三池炭鉱時代の 1878（明治 11）年に馬車鉄道として使われたのが始まりである。三井財閥が払い下げを受けた後、三井炭鉱坑口と積出港を結ぶ専用鉄道が建設され、1891（明治 24）年には横須浜（現在の大牟田川河口）～大浦坑間が開通された。その後、線路は勝立坑や宮原坑、万田坑などをつなぎ、1905（明治 38）年に三池港まで敷設されたことにより専用鉄道敷の全体像が整備された（図 3）。鉄道は、その後も支線の整備や路線の複線化、施設の更新が行われ、一時期は地方鉄道として旅客輸送も行われたが、石炭鉱業の衰退とともに縮小され、1997（平成 9）年の閉山時に三井化学大牟田工場内を走る線路以外は廃止された。2020（令和 2）年 5 月には、北九州市黒崎の工場で生産されていた濃硝酸の製造中止と仕入先の変更に伴い、全線廃止となった。工場内を走行していた専用鉄道敷は、防爆対策としてバッテリー走行も可能で、架線の必要がないため、動態保存を求める市民運動も広がりつつある。

④三池港

三池港は遠浅で干満差の激しい有明海に大型船を接岸し効率よく三池炭を輸出する積出港として 1908（明治 41）年に開港された（図 4）。それまで大牟田への大型船の来航が難しかったため三池炭を直積みすることができず、大牟田から対岸の長崎県島原半島南端の口之津港（南島原市）に 1 日かけて海上運送し、大型船に積み込んでいた。こうした課題を解決するため、大型船が直積みできる三池港が整備された。さらに 1905（明治 38）

図 3. 専用鉄道敷の当時の様子（左）と廃止後の現在の状況（右）
（資料出所）大牟田の近代化産業遺産ホームページ（https://www.miike-coalmines.jp/）

図 4. 開港前の三池港（左）と開港後の現在の状況（右）
（資料出所）大牟田の近代化産業遺産ホームページ（https://www.miike-coalmines.jp/）

年に三池炭鉱専用鉄道が三池港まで敷設されたことで、坑口（生産現場）から港（搬出所）まで連続した石炭運搬が可能となった。

3　大牟田の労働史・史料

（1）大牟田市石炭産業科学館のオーラルヒストリー[5)]

①組織概要

大牟田市石炭産業科学館は大牟田市が所管する、日本の近代化をエネルギー面から支えた日本最大の炭鉱の三池炭鉱の歴史を後世に伝えるために1995（平成7）年に開館された施設である（図5）。同施設が行う主な活動は、大牟田の歴史や炭鉱などを紹介する「常設展示」と石炭やエネルギーに関する企画展示やイベントを定期的に行う「イベント・企画展」であり、表1は常設展示を、表2は2020（令和2）年度のイベント・企画展の一覧をそれぞれ整理したものである。なお、常設展示の「こえの博物館」は後述する同施設が映像記録をアーカイブ化して、視聴できるようにしている。同施設は8名のスタッフ（市職員1名、非常勤スタッフ7名）で運営されている。

（2）「こえの博物館」事業～映像記録アーカイブ

「こえの博物館」事業は、大牟田市がこれまで積み重ねてきた大牟田のまちの石炭産業の歴史を

図 5. 大牟田市石炭産業科学館（全景）
（資料出所）大牟田市石炭産業科学館ホームページ（http://www.sekitan-omuta.jp/）

表 1. 常設展示の概要

種　類	概　要
大地の記憶	映像による石炭の誕生の紹介
炭鉱技術のあゆみ	模型と映像による石炭を取り巻く人と技術の進歩の紹介
時代と大牟田のあゆみ	資料、写真、展示品などによる大牟田の歴史の紹介
石炭エネルギーの利用	暮らしと石炭をつないだ道具（蒸気機関車やストーブ等）などの展示
ダイナミックトンネル	炭鉱の坑内作業で用いられた巨大機械（電気機関車や採炭用カッター等）などの展示
エネルギーと遊ぼう	エネルギーに関する 8 種類の体験展示
暮らしを支える石炭	石炭化学製品の紹介
映像ホール	石炭で栄えた大牟田の歴史に関する映像作品の上映
こえの博物館	「こえの博物館」事業で撮影した映像の紹介
インフォメーションコーナー	『明治日本の産業革命遺産～製鉄・製鋼、造船、石炭産業』の構成資産の紹介

（資料出所）大牟田市石炭産業科学館ホームページ（http://www.sekitan-omuta.jp/）

表 2. 2020（令和 2）年度のイベント・企画展の一覧

イベント・企画展
連続講演会「第 4 回三池炭鉱掘り出し物語」
春の企画展「思い出の三川坑」
石炭館劇場～みんなのおはなし会～
「石炭館　ファミリーコンサート」
令和 2 年度 石炭館名誉館長連続講座
第 21 回　炭都写真コンテスト作品展・思い出のスナップ写真展
連続講演会「第 3 回三池炭鉱掘り出し物語」
「一家に 1 枚」ポスター プレゼント
世界遺産登録 5 周年記念『三池港と洞海湾～「明治日本の産業革命遺産」企画展 3 ～』
文化の日　石炭館無料公開（11 月 3 日）
第 8 回　炭都芸術祭 in 大牟田
連続講演会「第 2 回三池炭鉱掘り出し物語」
第 21 回　葦ペン画展
クリーン・コール・デー　9 月 6 日（日）石炭館無料公開
夏の鉄道展関連イベント「鉄道 DE あそぼう♪」
夏の鉄道展
連続講演会「第 1 回三池炭鉱掘り出し物語」

（資料出所）大牟田市石炭産業科学館ホームページ（http://www.sekitan-omuta.jp/）

映像記録として後世に伝えることを目的とした事業である。同施設の展示内容が石炭産業の発展の変遷を中心した展示物だけではなく、大牟田独自の歴史的な出来事や炭鉱に生きた人たちの暮らしも展示してほしいとの市民からの要望が寄せられたことがその背景にあった。映像ジャーナリストの熊谷博子氏の監督の下、同事業は 2 回に分かれて実施された（表 3）。第 1 期は 2001（平成 13）年度から 2 年間で、32 か所の近代化遺産の施設と 72 人の炭鉱に関わった人々の取材と撮影が行われた。その期間は取材・撮影日数 104 日、撮影時間は約 110 時間に及び、取材・撮影から得られた

表 3. ドキュメンタリー映像作品の概要

タイトル	内　容	上映時間
炭都シンフォニー 炭鉱電車の走るまち	大牟田のまちが炭鉱とともに発展する中で、どのような歴史的な出来事を経験し閉山を迎えたのかを簡潔にまとめた入門編の作品	20分
炭都シンフォニー　みいけ　炭鉱の声が聞こえる	大牟田が炭鉱と共に発展する中で培った歴史と文化を知るための学習教材用作品	40分
炭都シンフォニー 三池の語りべたち	炭鉱の発展とともに大きくなった大牟田のまちの様々な歴史を三つのテーマに整理 1部：終戦までの歴史と炭鉱の仕事 2部：戦後最大の労働争議である三池争議 3部：炭鉱での災害を生き抜いた本人やその家族の証言	 40分 40分 30分
炭都シンフォニー 三池炭鉱からの声	熊谷博子監督による大牟田のまちの再生物語	100分
続編　三池　海と港の物語	大牟田のまちが炭鉱とともに発展する中で、どのように海や港とかかわってきたかをまとめた作品	30分

（資料出所）大牟田市石炭産業科学館提供資料をもとに作成。

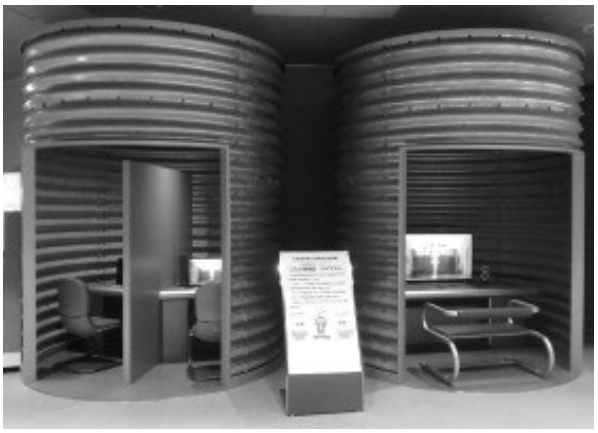

図 6.「こえの博物館ライブラリー」
（資料出所）大牟田市石炭産業科学館ホームページ
（http://www.sekitan-omuta.jp/）

証言をもとに「炭都シンフォニー」4種類6作品のドキュメンタリー映像が制作された。

第2期は2016（平成28）年度からの2年間で大牟田市の市制100周年事業として行われた。その活動内容は、①ドキュメンタリー映像「三池～海と港の物語」の制作と②第1期、第2期等で撮影した三池炭鉱関連の映像資料のアーカイブ化であった。第1の映像作品は三池港の魅力と歴史、人と人をつなぐ海と港の役割を描いた作品で、港の発展を陰で支えた人々の証言をもとに制作された。ドキュメンタリー映像は第1期の制作された6作品とともに同施設で常設の上映プログラムの1つとして上映されるほか、「こえの博物館ライブラリー」で視聴することができる（図6）。第2の映像資料のアーカイブ化は熊谷氏が第1期と第2期を通して取材・撮影した映像資料を「三池争議」「戦時下の強制労働」「炭じん爆発事故」「近代化産業遺産」などの12のテーマ別に整理した（表4）。総再生時間は約25時間に及び、「こえの博物館ライブラリー」として公開されている。

表 4.「こえの博物館ライブラリー」12 のテーマ

No	テーマ
1	まちの発展と炭鉱の生活
2	三池炭鉱・戦前の歴史
3	炭鉱の労働と職業病
4	三池争議　それぞれの証言１　闘いの表と裏
5	三池争議　それぞれの証言２　闘いの最前線で
6	炭じん爆発事故　それぞれの証言１　CO（一酸化炭素）中毒患者になって
7	炭じん爆発事故　それぞれの証言２　長い闘い
8	三池炭鉱の近代化産業遺産
9	松尾蕙虹さんが語る三池炭鉱１　炭鉱の女たち
10	松尾蕙虹さんが語る三池炭鉱２　CO 患者と家族の日々
11	武松輝男さんが語る三池炭鉱
12	三村孝一さんが語る CO 中毒と医療

（資料出所）熊谷博子氏ホームページ（https://www.hirokokumagai.com/）

図 7. 大牟田市立図書館（全景）
（資料出所）大牟田市立図書館ホームページ（http://www.library.city.omuta.fukuoka.jp/）

（2）大牟田市立図書館所蔵の三池炭鉱関係資料 [6)]

①組織概要

大牟田市立図書館は 1952（昭和 27）年に開館された蔵書数約 30万冊（303,639冊、2019年度現在）[7)] の、大牟田市立三池カルタ・歴史資料館との複合施設である（図 7）。

②三池炭鉱関連資料

福岡県内の市立図書館は、県内の資料を郷土資料として収集しているが、同図書館は大牟田関係の資料（図書、新聞、雑誌、パンフレット、リーフレットなど）に限定して収集している。大牟田の地域性のため、収集する資料の多くは三池炭鉱関係資料であり、主なものは 1959（昭和 34）年～ 60（昭和 35）年にかけて起きた「三池争議の関連資料（ビラ）」と「三池争議刑事事件裁判資料」、1963（昭和 38）年に発生した三池三川炭鉱炭じん爆発に関わる「三池 CO 家族訴訟のための裁判記録と関係資料」、明治から戦前まで行われた三池炭鉱における囚人労働に関する「三池囚人労働関係資料」、三池鉱山の社史、社内報などの「会社資料」、そして「強制連行関係資料」などである（表 5）。その規模は、図書として登録されている郷土資料（三池炭鉱関連資料以外の資料も含む）は 2014年現在 8,123冊で、このほかに図書として登録されないビラなどの郷土資料（通称

表 5. 大牟田市立図書館が所蔵する主な三池炭鉱関連資料

・三池争議関係資料（ビラ）
・三池争議刑事事件裁判資料
・三池 CO 家族訴訟のための裁判記録と関係資料
・三池囚人労働関係資料
・会社資料
・強制連行関係資料
・その他

（資料出所）大原俊秀（2015）「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第 30号をもとに作成。

表 6. 目録

○大牟田市立図書館所蔵郷土資料目録　第三版
○「三井三池炭鉱炭じん爆発事件史料集成」の別冊収録の史料リスト及び CD-ROM
・大牟田市立図書館のオンライン検索（OPAC）
・K および SK のカード目録
○ 2014 年目録（大原氏作成）
・郷土資料事項索引

（資料出所）大原俊秀（2015）「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第 30号をもとに作成。
（注）「○ 2014年目録（大原氏作成）」は正式なタイトルが記載されていないため、仮称として記載している。

「SK 資料」）や未整理の資料もある。これら資料群は同図書館が長年にわたり収集していることのほかに、会社や労働組合に資料の寄贈を依頼したり[8]、三池炭鉱に関わった人たちから寄贈される資料もある。

資料の保管については図書として登録されている資料は同図書館本館に、SK 資料、未整理の資料は分室（生涯学習支援センター〔元福岡県立大牟田南高校〕）にそれぞれ保管されている。

収集した資料群は整理して目録が作成され、オンライン等で検索できるようになっているほか、冊子も作成されている（表 6の「○」印がついている目録）。以下では、それらの概要を紹介する[9]。

大牟田市立図書館所蔵郷土資料目録　第三版

大牟田市立図書館所蔵郷土資料目録は、同図書館が所属している大牟田に関係ある図書をはじめ、新聞、雑誌、パンフレット、リーフレット等が収録された目録で、そのほとんどが三池炭鉱関連である。1965年に初版が発行され、1968年に第二版が、1983年に第三版がそれぞれ発行された。この目録は第三版を最後に改訂版が発行されていない。資料の収録点数が増えたこと（初版 307点、第二版 493点、第三版 1745点）、現在データ化されていない資料が収録されているため、その作業に多大な資源（資金、時間、人員等）が必要となることが主な理由である。目録には同図書館が収集した資料の「書名（編著者）」「出版地（出版社、出版年）」「頁数（大きさ）」「内容注記」「分類（一連番号）」が掲載されている。

表 7. 目録

no	目　録
1	松尾惠虹資料目録
2	原田正純資料目録
3	荒木忍資料目録
4	森弘太資料目録
5	野田春次刑事裁判記録資料目録
6	若松沢清資料目録
7	浦川守資料目録
8	三池争議刑事事件等裁判記録資料目録 別冊　解説と利用の手引き 添付資料１　三池闘争関連被処分者一覧 添付資料２　三池争議不当弾圧事件記録 添付資料３　「三池争議事件裁判一覧表」『朝日新聞』1964 年 7 月 8 日
9	武松輝男資料目録（2012 年完成）
10	小崎文人資料目録（1997 年完成）

（資料出所）大原俊秀（2015）「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第 30号をもとに作成。

「三井三池炭鉱炭じん爆発事件史料集成」の別冊収録の史料リスト及び CD-ROM

「三井三池炭鉱炭じん爆発事件史料集成」の別冊収録の史料リスト及び CD-ROM は、収録されている三井三池炭鉱炭じん爆発事件に関する史料を検索しやすいように作成された目録である。目録（史料リスト）には史料の「史料番号（マイクロフィルムの収録場所）」「文書名」「文書作成者」「文書宛先」「年月日（西暦表記）」「備考（史料の位置づけ）」が掲載されている。

2014年目録

2014年目録は、「三井三池炭鉱炭じん爆発事件史料集成」に収録されなかった資料を中心とした目録である。この目録は大原氏が 2011年に退職されてからボランティアで作成し、その一部が 2014年 9月 1日に完成した。その概要は表 7のとおりで、「題名」「著者」「出版社」「出版年」「備考」が掲載されている。

4　記憶を引き継ぐ活動

前節では、大牟田における史料の保存・展示の状況について説明してきた。つづく本節では、大牟田における歴史や集合的記憶の関わる社会活動について紹介する。

大牟田では、歴史学のための資料保存だけでなく、住民たちの、住民による、住民のための記憶の記録・保存の運動があり、それらの活動が前節で紹介した地域の歴史実践やまちづくりを支えていた。

（1）NPO 法人 大牟田・荒尾：炭鉱のまちファンクラブ

第一にあげられる地域活動が、「NPO 法人　大牟田・荒尾：炭鉱のまちファンクラブ（以下、炭鉱のまちファンクラブ）」である。この NPO は、大牟田市、荒尾市及びその周辺に残る三池炭鉱関連施設の保存および活用を通じたまちづくり活動団体であり、2001年 10月に設立された。様々な地域活動の中心的な役割を果たしている。この団

体の設立の趣旨は、この団体のホームページに書かれている。長文になるが、どのような思いからこの団体が生まれたのかがわかる文章なので、引用する。

「会の趣旨に変えて：会員の体験より
（前略）しかしながら、まちを巡って、同時に驚いたのは、それらの象徴ともいえる産業遺産と呼ばれる炭鉱施設達は、マップには載っているが、現地には案内板一つ無い。そして、ほとんどが放置されて崩壊しつつあることでした。さらに、まちに住む人々の感覚を耳にしたときには愕然としました。

「企業城下町という性格上、企業に対して問題となるようなことは、誰も言わないし、歴史に触れられたくないという声が多いんだよ」

日本を築いた都市。20世紀を担ってきたまち。それは、このまちの歴史を築いてきた人々のたゆまない努力と、多くの尊い命の上に成り立っているのだと思います。これらの歴史を語る施設、風景を「ないがしろ」にすることは、この地に眠る多くの方々に対して、大変な仕打ちではないでしょうか。私たちは、これらの施設や風景、そして人々の思いが、まちの人々に愛されながら、地域とともにいきるものとして後世に残すべきだと思います。

私たちの活動が、大牟田・荒尾の内外を問わず、広く人々の価値観を転換するきっかけになればと思います。

私たちの目標は、「炭鉱のまちの風景・心象」が次世代に継承されていくことです。

この目標に向かって、私たちは、大牟田市、荒尾市及びその周辺に残る三池炭鉱関連施設の保存および活用を通じたまちづくり活動を行いたいと考えています。」

まず、産業遺産に対して「ないがしろ」にされているという認識があり、それは住民の中でも半ば共有されてしまっているという事実があったことがわかる。これは、大牟田・荒尾特有の現象ではなく、産業遺産は、他の文化遺産のような歴史遺産と比べても低く評価されており、産業遺産の中でも現代に近づけば近づくほど、その価値は発見され難いと言える。それゆえ、その「産業遺産」という概念で、その価値が発見される必要があったのである。その後世に残すべき価値とは、歴史学上の価値だけでなく（それを否定するものではないが）、「まちの人々に愛されながら、地域とともにいきるもの」として残ることが目的とされている。次世代に継承される「炭鉱のまちの風景・心象」とは、住民の体験を集めて、大牟田内外に向けて発信していることを目的としている。

このような意図は、団体設立者であり、研究者である永吉守氏の説明からも知ることができる。永吉（2003, 2008）によれば、まず、団体設立以前に、大牟田・荒尾において産業遺産へのまなざしが変わり、保存や活用に向けた気運が高まっており、その結果として「炭鉱のまちファンクラブ」が設立されたことがわかる[10)]。団体が目指した目標として、行政や企業との協力・協働体制はとるが、市民セクターとして「行政からの独立性を持たせた団体」として、観光やまちづくりを構想することがあげられる[11)]。

加えて我々は、現、副理事長の藤木雄二氏に現在の活動状況を知るためにインタビュー調査を行った（2020年2月26日実施）。藤木氏は、長年、大牟田市役所に勤めておられた方であり、市役所勤務時代から炭鉱のまちファンクラブの活動に参加し、現在は副理事長として活躍されている。我々は、インタビュー後に藤木氏の車で街案内をしてもらった。

藤木氏の発言と配布資料（第33回愛知自治研修会第2分科会「新しい公共」を再構築する【自主レポート】）、およびホームページによると、炭鉱のまちファンクラブは、正会員が25－30名、毎月の定例会には約10名が集まっている。ファンクラブ通信を刊行しており、この読者は約100名である。炭鉱のまちファンクラブがこれまで手

掛けていた活動とその概略は以下の通りである。なお、現在は終了している事業も含まれる。

①石炭産業科学館館内案内及び企画展業務

大牟田市の委託を受けて業務を行っている。前節での紹介した炭鉱のまちファンクラブの中野浩志氏が企画担当をしている。

②万田炭鉱館指定管理（終了）

熊本県荒尾市の委託を受けて元炭鉱マンの協力を得て行う。

③万田坑市民まつり（終了）

万田坑ファン倶楽部と共催で、施設ガイド、スケッチ大会、演芸会、炭坑節総踊りなどを実施。地域ぐるみのもちつき大会も開催。

④ TantoTanto ウォーク

大牟田・荒尾に残る炭鉱遺産を歩いて巡るウォーキングを実施。

⑤「石炭今昔三池かるた」の制作販売

大牟田は、「かるた発祥の地」として有名である。大牟田美術協会･荒尾美術協会の協力を得て、炭鉱の歴史に親しむために三池炭鉱を題材とした「かるた」を制作・販売。

⑥宮原抗社宅の改修工事と市民公開（2004年度事業）

宮原抗に隣接する旧社宅を、大牟田市、有明高専と協働で改修。施設公開日には、教育委員会の手伝い、地域住民・中学校と草刈りボランティアを実施。

⑦福岡県教育委員会委託事業「筑後子どもキャンパス」（2005－2009年度）

子供対象に地域資源を活用した一泊の体験活動の機会を提供。化石の採集、石炭の採取と実験、炭鉱煙突の実測などの体験学習を企画・実施。

⑧三井港倶楽部の保存運動（2005年度事業）

1908年に三井港と同時竣工された倶楽部施設の保存活動。営業されていたレストランが休業し、施設の撤去や移転が危惧されていたが、大牟田経済倶楽部、地元商店街、NPO の署名活動で沸き上がった市民の声を背景に、大牟田経済倶楽部が核となり、（株）港倶楽部保存会が設立され保存された。これをきっかけに大牟田市は寄付金制度「近代化遺産保存活用基金」が創設された。

⑨文化庁委嘱事業（2006年度事業）

荒尾市万田抗で「三池炭鉱ほりだしものがたり～トラスト創設に向けての協力連携プラットフォームづくり」を実施。①山の神コンサート、②小中学校教諭のためのワークショップ、③公開講座「三池炭鉱が世界遺産になるって、ホント！？」、④万田抗の保存を考える「ほりだし講座」を実施。

⑩郵便事業会社の助成事業（2007－2010年度，2018年度―継続中）

三池港及び周辺施設の保存活用について、調査を行うとともに保存に対する市民の気運を盛り上げる事業。2007年度は三池港ドックに隣接する旧長崎税関三池税関支署の測量と詳細図面の作成。2008年度は開講当時から現役で稼動している三池港閘門の動くシステムを理解するための模型を作成。これらは有明高専の協力を得ている。また、シンポジウムなどの開催に合わせて文献調査を実施している。2018年度からは2度目の事業採択を受け「三池炭鉱で使役された日本在来馬の顕彰・保護・共生を目的とした調査・啓発事業」を実施している。同事業では、この他にも福岡大学（福岡・東アジア・地域共生研究所）と石炭産業科学館の三者で「三池炭鉱掘り出し物語」に取り組み、講演と講演録の出版で、記憶に残す活動をしている。さらに「かるたでかたる市庁舎本館物語」で国登録有形文化財の大牟田市庁舎本館の保存運動にも取り組んでいる。

⑪近代化遺産のネットワークづくり

九州各地の近代化産業遺産がある地域における団体との情報交換を行い、連携関係を構築している。

上記の多様な活動の中で注目すべきは、地域的にも組織的にも様々な人々がネットワーク化されていることである。地域的には、地元住民はもちろんであるが、大牟田市と荒尾市と横断し、さらに九州全体までネットワーク化する取り組みがあった。それは、NPO 間の連携だけでなく、美術協会、教育委員会、有明高専、大牟田経済倶楽部、地元商店街などの協力も含まれており、イベントごとに協力者を組み合わせる役を炭鉱のまちファンクラブが担っていると言える。この協力者の多彩さが、イベントの多様性を生んでいると考えられる。

大人だけでなく、歴史学には関心がない子供たちに対しても、体験学習を積極的に取り入れている。これは、NPO の設立の趣旨に書かれてある「炭鉱のまちの風景・心象」を次世代に継承するという目的に適っていると言えよう。

例えば、大牟田美術協会発足 60周年記念事業、かつ炭鉱のまちファンクラブの発足 10周年として「炭鉱のまちの色を探そう―三池炭鉱のクレヨンづくり」は、企画された三池炭鉱関連施設を巡り、各施設で「炭鉱の色」を見つけて、その色のキャッチコピーを付ける。それを基に 6色のクレヨンを製作した（図 8）。炭鉱閉山前の 1990年に大牟田経済倶楽部は、まちのイメージについて

図 8. 炭鉱のまちの色を探そう―三池炭鉱のクレヨンづくり
（東洋美術学校の全面協力による）

市民アンケートを行ったところ、色にたとえると「灰色」「茶色」「黒色」が83%を占めた。このことを受け、灰色以外の色を見つける作業の中で、まちの風景への愛着などを作ろうという意図である。

（2）三川坑に慰霊碑を建てる会

次にあげるのは、「三川坑に慰霊碑を建てる会」（代表実行者：芳川勝氏）が行っている三川坑の慰霊碑のクラウドファンディングである（図9）。このクラウドファンディングには、特定非営利活動法人「三池港未来のまちづくり会」の入江裕二郎氏も代表実行者として参加している。

「三川坑に慰霊碑を建てる会」は、1963年11月9日に三川坑で起きた炭じん爆発による被害者の慰霊碑を建てることを目的として結成された団体で、元三川坑作業員や事故の遺族、市民団体などによって作られた。この事故は、死者458名、一酸化炭素中毒（別名CO中毒）患者839名であり、戦後最悪の炭鉱事故・労災事故と言われている。

1997年3月に三井三池炭鉱は閉山しているが、先述した通り、2015年に三池炭鉱の関連資産を含む「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録され、大牟田の近代化産業遺産は世界中の注目を集める場所となり、三川坑跡にも多くの方が訪れるようになった。事故の慰霊碑は、労働組合によって大牟田と荒尾の両市内にそれぞれ建立されていたが、爆発現場の三川坑跡にはなかった。ガイドを務める元作業員らに見学者から「なぜ慰霊碑が事故現場にないのか」との指摘がたびたび寄せられた。芳川代表らは「これだけの人が亡くなったのだから慰霊碑は現場にこそ必要だ。事故を教訓として語り継ぐためにも、ぜひ協力をお願いしたい」と呼びかけた[12)]。

クラウドファンディングのページ（Readyfor）によれば、募集終了日2020年4月30日目標金額の5,000,000円で開始され、最終的な支援者は211人、支援総額は5,550,000円になり、目標額を超えることができた。このページ以外からの募金もあり、最終的に1250万円が全国から集まっ

図9. クラウドファンディングのページ

（資料出所）Readyfor「犠牲者458人。三川坑跡に炭じん爆発事故の慰霊碑を建てたい」のページより（https://readyfor.jp/projects/mikawa-381109）

た[13]。その後建設が開始され、2020年11月9日に三川坑炭じん爆発慰霊碑の除幕式が行われた。

この活動の成功は、事故の当事者たちが、外からの目線によって事故の伝承の価値を再発見し、記憶の想起と未来への伝承へと向かった活動と言えよう。

5　生きている遺産をめざして

本稿では、大牟田における労働史・史料の保存の状況を調べ、それらの歴史史料を核とした地域活動の広がりを紹介した。第2節で紹介した大牟田市石炭産業科学館のオーラルヒストリーや大牟田市立図書館の三池炭鉱関連資料の歴史研究上の高い価値は、論を俟たない。日本の近代史・現代史を理解する貴重な史料と言えよう。ただし、研究上の価値があったとしても、史料の価値を広く社会全般で共有し、歴史研究以外も人々にとっても貴重な史料や遺産になるためには、住民を中心にした歴史実践が必要だったと言える。

過去の遺産を外部から価値付けられるだけのものではなく、住民によって発見されるものでもあった。資料と共に人々の記憶を共有するために行われた様々な活動は、住民によるまちづくりでもあった。そして、それらの諸活動が、史料を「開かれた史料」又は「生きている遺産」に変えていったと言えよう。本稿で大牟田の取り組みを紹介したのは、このような歴史実践から我々が学ぶことが多いと考えたからである。

［謝辞］

本調査は、公益社団法人・教育文化協会の研究助成（法政大学キャリアデザイン学部）と科学研究費助成「エゴ・ドキュメントを使った「戦後労働社会」形成の歴史研究」（基盤研究（C），19K02115，代表：梅崎修）、および科学研究費助成「国際労働運動の発展過程―オーラルヒストリーによる労働運動の戦後史研究の再構築」（基盤研究（C），17K03859，代表：田口和雄）の助成を受けたものである。ここに記して謝意を表します。

注

1）同様の試みを世界のレイバー・アーカイブに対して視察調査として五十嵐（2005）がある。

2）梅崎・田口（2012, 2013, 2014）、田口・梅崎（2012, 2013a, 2013b, 2014）、梅崎（2014, 2015a, 2015b, 2016, 2017）を参照。

3）大牟田市の概況は大牟田市役所ホームページ（https://www.city.omuta.lg.jp/）をもとにしている。

4）「大牟田市の歴史文化遺産」の記述は、大牟田の近代化産業遺産ホームページ（https://www.miike-coalmines.jp/）をもとにしている。

5）大牟田市石炭産業科学館におけるオーラルヒストリーの事例は、大牟田市石炭産業博物館への調査ならびに中野浩志氏（企画担当）へのインタビュー調査（2020年2月27日実施）に基づいている。

6）大牟田市立図書館所蔵の三池炭鉱関係資料の事例は、大牟田市立図書館への調査、大原俊秀氏（元大牟田市立図書館職員）へのインタビュー調査（2020年2月27日実施）、並びに小原氏が提供していただいた資料（大原俊秀〔2015〕「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第30号）に基づいている。

7）福岡県公共図書館等協議会（2020）「令和2年度福岡県公共図書館等概況」p.9。

8）2005年4月の三池炭鉱労働組合の解散時に同組合が保有していた資料のうち書籍が同図書館に寄贈されたほか、書類は九州大学に、写真、道具などのは大牟田市石炭産業科学館にそれぞれ寄贈された（大原俊秀，2015）。

9）詳細は、大原俊秀（2015）「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第30号を参照のこと。

10）永吉（2003）によれば、炭鉱のまちファンクラブ設立以前、故郷を懐かしむ愛好会的性格と地域の産業遺産を活用したまちづくりという路線の違いがあった。

11）永吉（2003）では、その行政や企業との協働に

ついて課題があることも記されている。

12）朝日新聞（2020年1月30日）「1963年　戦後最悪の労災「三井三池三川炭塵爆発」」。

13）朝日新聞（2020年11月10日）「三井三池炭塵爆発、57年後に慰霊碑　1千万円超CFで」。

参考文献

五十嵐仁（2005）『この目で見てきた世界のレイバー・アーカイヴス―地球一周：労働組合と労働資料館を訪ねる旅（法政大学大原社会問題研究所叢書）』法律文化社

梅崎修，田口和雄（2012）「Regional Oral History Office (ROHO) のオーラルヒストリー・アーカイブについて」『生涯学習とキャリアデザイン』（9）p.75-85.

———，———（2013）『コロンビア大学・CCOH (Columbia Center of Oral History) におけるオーラルヒストリー調査とアーカイブについて』「法政大学キャリアデザイン学部紀要」（10）p.319-338.

———，———（2014）「MATRIX（The Center for Digital Humanities and Social Sciences at Michigan State University）におけるオーラルヒストリー・デジタル・アーカイブの試み」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』（11）p.279-296.

梅崎修（2014）「英国におけるオーラルヒストリー（1）―フリーランスのオーラルヒストリアンたちとの出会い」『生涯学習とキャリアデザイン』（12）p.123-130.

———（2015a）「英国におけるオーラルヒストリー（2）―収集・整理・公開の方法」『生涯学習とキャリアデザイン』12(2) p.121-130.

———（2015b）「英国におけるオーラルヒストリー（3）―Britain at Work：Voices from the Workplace 1945-1995 の活動」『生涯学習とキャリアデザイン』13(1), p.135-143.

———（2016）「英国におけるオーラルヒストリー（4）―Centre for the Study of the Production of the Built Environment の活動」『生涯学習とキャリアデザイン』13(2), p.103-109.

———（2017）「英国におけるオーラルヒストリー（5）―Scottish Oral History Centre の活動」『生涯学習とキャリアデザイン』15(1) p.213-222.

大原俊秀（2015）「大牟田市立図書館が所蔵する三池炭鉱関係資料とその目録について」『エネルギー史研究』第30号 p. 83-109

田口和雄，梅崎修（2012）「アメリカにおけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の現状について―UCLA Center for Oral History Rsearch (COHR) のインタビュー調査をもとに」『高千穂論叢』47(1), p.99-119.

———，———（2013a）「NYU Tamiment Library & Robert F. Wagner Labor Archives におけるオーラルヒストリーのデジタル・アーカイブ化について」『高千穂論叢』47(4) p.97-118.

———，———（2013b）「The New York Public Library for the Performing Arts and the Ellis Island Immigration Museum におけるオーラルヒストリー・プロジェクトについて」『高千穂論叢』48(1・2). p.311-323,（高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅰ）.

———，———（2014）「WSU Walter P. Reuther Library and Urban Affairs におけるオーラルヒストリー・プロジェクトとアーカイブの現状について」『高千穂論叢』48(3・4), p.139-162,（高千穂学園創立110周年記念論文集Ⅱ）.

永吉守（2003）「エコミュージアム型産業遺産保存・活用のNPOの実践と研究」『九州人類学会報』(30), p.28-39

———（2008）「市民に寄り添う活動家兼研究者―近代化産業遺産活用の事例より」『九州人類学会報』(35), p.30-45

福岡県公共図書館等協議会（2020）「令和2年度福岡県公共図書館等概況」